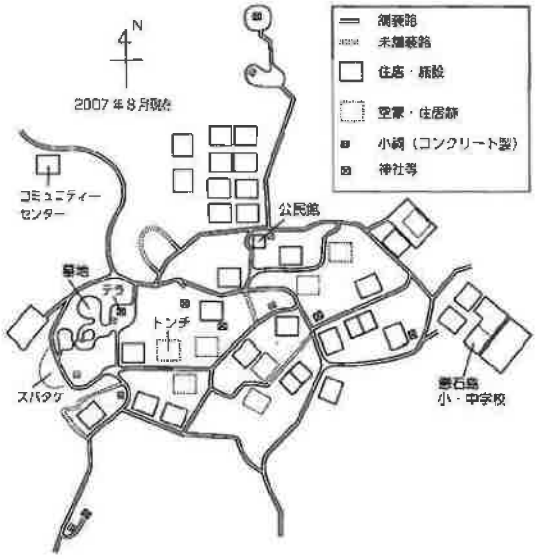
［行事報告］悪石島のボゼと地域行事の継承について

吉　満　郁　恵

はじめに

黎明館２階民俗部門「南島」のコーナーには，悪石島のボゼ（第１図）が２体展示してある（第２図）。ボゼは旧暦７月16日の夕方，十島村悪石島の中心地の上集落（第１地図）にある悪石島学園にて，呼び太鼓の音に導かれ，盆踊りの最終直前に現れる来訪神で，地域と人々の邪気を追い払うとされる。

筆者はボゼと盆行事に興味を持ち，令和６（2024）年８月17～20日，個人的に「ボゼツアー」へ参加し，その縁で十島村職員や住民，観光ガイド，ツアー参加者，悪石島盆踊り保存会[1]会長の有川和則氏（以後，有川氏）から様々な情報を得ることができた。この論考では，これらの情報やツアー体験を基に，盆行事やボゼの現在と過去（先行研究）の比較を行い，さらに文化施設（博物館・資料館等）での調査で把握したボゼの特徴をまとめ，盆行事とボゼの情報提供を行う（第１～４章）。加えて，ボゼツアーのような文化観光（文化資源の観覧や体験活動等を通じて文化についての理解を深めることを目的とする観光）等が地域行事の継承に貢献していること（第５章），展示解説員の仕事も地域行事の継承に関わっていることを述べたい。



第１地図：上集落（佐藤 2007，34 頁　図１）
（悪石島小・中学校は，現在は悪石島学園）

１　ボゼツアーの概略と筆者の直接観察

（１）ボゼツアーの概略

平成15（2003）年から，民俗無形文化財の保存・伝承，十島村の観光促進を目的として，十島村主催のボゼツアーが始まった[2]。令和６年は８月17～20日（旧暦７月14～17日）に実施した。通常，盆行事（ボゼ）を見るには，ツアーへの参加か，フェリーで島に行きキャンプ場に宿泊するか[3]のどちらかだ。移動手段が船のため，天候の影響が大きい。十島村職員の松下宗磨氏（以後，松下氏）によると，令和５（2023）年の台風によるツアー中止の影響もあってか，令和６年は50名の募集定員に対し，200名程度が応募した。平成21～令和６（2009～2024）年までのツアー催行状況情報によると，過去16回のうち，実施されたのは８回だった。中止された８回のうち５回（平成25～27，30，令和５（2013～2015，2018，2023）年）が台風の影響，１回（平成31（2019）年）がユネスコの式典のため，残りの２回（令和元～２（2020～2021）年）はコロナの影響である。今回のツアーでも，３日目に来訪予定だった小宝島は台風の影響で上陸できなかった。

ツアーの日程は，１日目に鹿児島港で集合・受付・出発。２日目に宝島観光。３日目に悪石島観光とボゼ祭り。４日目に鹿児島港に帰着であった。

（２）ボゼツアーでの筆者の直接観察

筆者とボゼツアー参加者は，３日目の８月19日（旧暦７月16日）午前に金山神社にて，令和４（2022）年にボゼ役を経験した，現地ガイドの穴澤颯氏（以後，穴澤氏）への質問後，テラ（墓地の東側に隣接する広場，福昌寺末寺養徳寺跡）の入口へ向かったが，そこには，ボゼの製作現場を見せないためのポールがあり，関係者以外は入れなかった。

16時頃，テラで浴衣姿の住民が盆踊りを奉納する姿を見学する。踊りには小中学生の女の子も参

加している。有川氏によると，成人女性は，テラでも悪石島学園でも盆踊りに参加しない。テラ内のセガケ（施餓鬼）棚には，線香と水の子（粟，賽の目に切った瓜・胡瓜・茄子，カボチャ，トイモガラ，カライモ，鳳仙花，チマキなどを小さく千切り混ぜたもの）が供えてあり，アカシュ（赤土：島内の決まった所から採られる赤土を水で溶いたもの。ボゼに使われる）を作る石壺（石鉢・手水鉢）があった（第３図）。盆踊り後，テラは，ボゼの着付け準備のため，再び関係者以外は入れなくなった。

16：10頃，住民とツアー参加者はテラから歩き，悪石島学園のコミューン前に集まる。住民とツアー参加者用にパイプ椅子が準備されており，座る人もいた[4]。ボゼがテラで着付けている間，悪石島学園のコミューン前で盆踊り（今回は，ここでの盆踊りに女の子は参加していなかった）（第４図）。盆踊りが終わる頃，１人の男性が携帯電話で（おそらくボゼの出現についての打ち合わせの）連絡を取る[5]。

17：00頃，盆踊りが終わると，１人の男性が太鼓を打ちだす（第５図）。「東西，東西，遠くの者は音に聞け，近くの者は寄って目でも見よ。ボゼがくっどー」と発し，これを合図にボゼが悪石島学園前の道路の二方向[6]から（学園の下（海）側から２体，学園の上（山）側から１体の順で），悪石島学園のコミューン前（住民やツアー参加者の前）にくり出す。ボゼは足をダッダッダッと踏みならしながら，体を傾け，体やボゼマラ（マラ棒）を押し付けるようにしながら，男女区別なく，アカシュをつける（第６図）。有川氏によると，各ボゼに観光客対応のボゼがいたり，動く場所をエリアで分けたりするなどの役割はない。太鼓が六調（ゆったりとしたリズム）へ変わると，暴れていたボゼ３体が集まり，しばらく体を揺らすようにして踊る（第７図）。太鼓のリズムが急変すると，再びボゼは暴れ始めるが，17：06頃にはボゼの補助役と共にテラへ引きあげる。しばらくして悪石島学園の子供達が，盆踊りの１つ「ハッパン大将」を踊る（第８図）。

17：50頃，筆者とツアー参加者の一部は，テラの裏山にて，ボゼの最後（壊されたボゼメンがビロウの葉の下に隠されている様子）を見た（第９図）。（有川氏によると，ツアー参加者が帰った後，17：40～55に悪石島学園のコミューン前で，18：00～15にスバタケ（墓地の下の丘に隣接し，前面に海を見渡す潮見所）で計２回，「お世話になりました」と庭戻しの踊りをして，盆が終わったとのことだった。）

以上のように筆者がボゼツアーで見学できたのは，盆踊り，ボゼの顕現（第３～８図），ボゼの最後（第９図）を含む盆行事の一部分である。そのため，盆行事全体については，渡山氏の「悪石島の旧盆の日程」に関する記述[7]を参照してほしい。概略すると，旧暦７月７～16日の盆に上集落で盆踊りが披露され，７～13日は精霊の迎え，14～15日は迎えた精霊の持て成し，15日夕方～16日は精霊を送る行事がある。16日夕方にボゼの登場があり，日常に戻るのは17日である。先祖代々受け継がれてきた年中行事の歴史は，400年以上前からとも言われている[8]が，有川氏によると，どのくらい長いか分からない。盆踊りの最後に登場するボゼが注目されがちであるが，盆行事は，祖霊祭の主旨と共に，収穫祭（「俵踊り（粟）」），豊漁祭（「魚釣り踊り」），航海安全の祈り（「コダシ（船旗）踊り」）等の多目的の盆踊りである[9]。

２　ボゼ

（１）ボゼの形態とボゼ（メン）の種類

ボゼ役は，アカシュと墨で彩色された大型の竹製の面（ボゼメン）を被り，ビロウ（コバ）の葉を全身にまとい，ビロウの葉の蓑からはみ出る部分にビロウの葉鞘[10]を使って体を隠し，足に地下足袋を履く。手には，アカシュのついたタブの木のボゼマラを持つ。ボゼ（メン）は，３種類ある。

① ヒラボゼ：頭が尖った（平べったい）ボゼ。一番大きく作る。

② ハガマボゼ：中くらいのボゼ。人間の頭状の（羽釜に似ている）形のボゼ。

③ サガシボゼ：家の中に上がり，隅に隠れている子供を探したりするため，ヒラボゼ，ハガマボゼより全体的に（一番）小さくする。令和６年は，悪石島学園のコミューンの建物内に人がいなかったので，サガシボゼは中に入っていない。総代（集落の世話人）の家，公民館での出現の頃まで（令和２年以前）は，中に入って，観客などを外に引き出し，外でハガマボゼ・ヒラボゼが待ち構えていた。

有川氏によると，現在もボゼの区別はあるが，その形の違いはあまり無い。サガシボゼと他のボゼとの違いは，ボゼメンの大きさのみだという。

（２）盆行事の中でのボゼの役割

先行研究[11]や有川氏によると，ボゼはボゼマラのアカシュを人に付けて「悪魔祓い」を行っている。渡山氏[12]も「お盆には，祭ってくれる人のいない霊，昔は遠島から流れて来る人等もいたので，そういうわからない人達の霊や悪いものも寄ってくる。お盆の最終日に，ボゼが見物人に迫り，威嚇し，赤シュイ（筆者註：アカシュのこと）を付けるのは，単に人間を脅しているのでなく，辺りに彷徨っている居残り霊を威嚇し追い払い，魔除けの赤シュイをつけているのだ」と指摘する。他にも「子宝に恵まれる[13]」という解釈も見受けられるが，これは渡山氏[14]と有川氏により否定されている。有川氏は「ボゼのおかげで子宝に恵まれたという話を人伝いに聞いて，そうなったのではないか。ボゼは怖い存在なので子ども達に悪いことをさせないようにという教育的要素もある」と述べている。

（３）ボゼメンとボゼマラの製作

ボゼメン製作（と「ボゼの着付け」の一部）については，元黎明館学芸課長（民俗担当）であった川野和昭氏（以後，川野氏）が昭和56（1981）年に記録したボゼメンに関する資料カードを基にし，ボゼメンの材料とボゼマラ製作に関しては，久保紘史郎氏（元鹿児島県立博物館学芸主事。以後，久保氏）が行った平成29（2017）年９月４～７日の現地調査報告[15]を基にして記述する。

ボゼ作りは15～70歳以下の男性[16]によって，旧暦７月14～16日の午前に，テラで行われる。製作する様子や製作途中のボゼ本体，変装するところは，本来女性や子供，部外者に見せてはならないとされている。この禁忌は，一時は厳格に守られていなかった[17]が，「それでは良くない」とのことで，平成17（2005）年から厳しくなっている[18]。現場を見せない理由は，有川氏によると「子どもがボゼの製作現場を見ると，驚かないから」，川野氏によると「異界から来訪するということが保たれないから」という。また川野氏は「アカシュは簡単に入手できない所にあり，採集は難儀なことである。この難儀を乗り越えるため，新人りの若者にアカシュ採りを課す。男性の年齢階梯制が認められるのだ」と言及する。有川氏は「若者でないといけないという決まりはないが，若い人に教えるという意味がある」という。

基本的にボゼメンの作業は，１日目に骨組み，２日目に紙貼り，３日目に色塗り。ボゼマラの作業は，１日目に枝の伐採から樹皮の剥ぎ取り，整形までを行い，３日目に色塗りである（第10～12図）。ボゼ登場後は，テラにて全てのボゼメンは壊されるため，ボゼメンの大きさや重さなどは分からない。反面，今回のボゼ登場後に１本のボゼマラがテラの小屋近くに残っていた（第13図）ことから，ボゼマラは，必ずしも壊すわけではないことが分かる。有川氏によると，今回使われたボゼマラ３本のうち，１本は令和６年に作り，２本は令和５年のものだった。

① 旧暦７月14日午前

穴澤氏によると，材料は決まった所から採り，上質なものを使う。ボゼメンの材料は，シタミテゴ（大きな竹製の背負い籠）の古テゴ（籠）（第14図[19]），竹ヒゴ，磯アマメ（フナムシ）テゴの蓋（第15図[20]），新聞紙，糊（小麦粉），藁，墨汁，アカシュ。繋ぎとめる物として，糸，ワイヤー，ビニールテープ，麻紐[21]が使われる。ボゼマラは，タブの木の枝で作る。

ボゼメン製作（第16～17図）のため，持ち寄ったテゴの胴部の半分を下２/３位のところまで切る。切り口がほどけないように切った部分を補強するために，両側を挟む形で竹ヒゴを当てる。さらに人が被ったときに首や胸に当たる部分であるため，ケガ等をしないように藁を当て，竹ヒゴで編んで固定する。竹ヒゴをテゴに差し込み，頭の形を作る。これには２つの方法がある。先ず側頭に当たる部分に１本の竹ヒゴをテゴの左右から１本差し込み曲げて，さらに前後に竹ヒゴを折り曲げテゴに差し込む方法と，前後左右から円錐状に竹ヒゴを折り曲げる方法である。外側ができあがると，補強のために内側から輪状に竹ヒゴをまわす。竹ヒゴの交点はすべて糸で結んで固定する。耳に当たる部分，耳たぶ（ミミンコ）に当たる部分は，すべて竹ヒゴを半楕円形の形でテゴに差し込む。耳たぶは下から差し込み，テゴとの角度が大きくなるよう（垂れた形になるよう）にする。まつげに当たる部分（コバネ），まゆげに当たる部分（オオバネ）[22]の外側は，トンボの羽根上に竹ヒゴを上から差し込み形成する。さらに，内側のくぼみをつけるために，半円形や竹ヒゴをまげて，外側の竹ヒゴに上・中・下と結びつける。次に，外側の竹ヒゴの頂点と，半円形の竹ヒゴの頂点３ヶ所とを結ぶ形で，補強のために竹ヒゴを１本入れて交点を糸で結ぶ。上顎に当たる部分は，テゴ

の前面に突き出す形で竹ヒゴをまわす。差し込み方法には，下から上に差し込む方法と，上から下に差し込む方法とがある。補強するために２本の竹ヒゴをそえ，交点は糸で結ぶ。下顎に当たる部分は，竹ヒゴを１本下側に半楕円形にまわし，下から上に差し込む。この部分に下の歯を取り付けるために，上顎との間隔が極端に開かないようにする。さらに補強のために，縦に３～４本を下からテゴに差し込み，他端を半楕円形との交点で糸を結び合わせる。さらに横に１～２本の竹ヒゴをわたし，半楕円形，縦の竹ヒゴとの交点をすべて結び合わせる。下顎の外側に当たる部分も，下顎（歯を取り付ける部分）の下側にまわす。この時に留意すべきことは，ボゼの仮面を被って走っても，大腿部がこの部分に当たらない程度にすることである。鼻は藁を丸めて折り曲げ，先を丸く，太くし，それを糸で縛り，上あごの竹ヒゴにのせる。交点を糸で結ぶ。歯の部分は，最初に切りとったテゴの上縁を用い，間を抜いて歯形を出す。

ボゼマラ製作のため，島内に広く自生しているタブの木の枝（直径６cm程）を切り落とし，樹皮を剥いで加工する。ボゼマラは適当な曲がりがあることが重要とされ，直線過ぎない枝を選んで切り落とす。切り落とした枝は基部の太い方がボゼマラの先端となり，枝先側の細い方がボゼマラの基部として利用される。のこぎりで切れ込みを入れた後，ナタや小刀を使って樹皮を剥ぎながら，男根状に削る。熟練したものが作業した場合，40分程度の工程である（第10～11図）。

② 旧暦７月15日午前

ボゼメン製作のための糊作りは，小麦粉を水で溶いて炊く。湯で溶くと団子状の糊ができ，良くない。糊を本体に塗るハケは，長さ20cm，径１．５cm程度のサネンの茎を数本切ってきて，先を石でつぶして作る。面を被ったときにのぞく穴を，面を被った状態で位置を決め，開ける。できた糊をサネンのハケで先日作った骨組みに塗る。歯部にも塗る。持ち寄った新聞紙を一重二重に張り合わせ，全体を新聞紙で包む形にする（第18図）。歯部にも貼る。口を開いた部分の中央に赤い四角の紙を貼る。目にする籠に新聞紙を貼る。紙を貼り合わせ終わったら，本体を天日で乾かす。

③ 旧暦７月16日の午前

ボゼメン本体，日，歯を屋外に出して乾かす。アカシュをテラの庭にある石鉢で溶かす。このとき，アカシュでない不純物は入念に取り除く（第12図）。先程と同様のサネンのハケを作る。墨汁を準備する。乾いた本体の上にサネンのハケでアカシュを塗る。乾いたら，サネンのハケを用いて墨汁の縦線を入れる（このアカシュと墨汁を塗る順番が逆になり，墨汁の縦線を入れて，その後，間をアカシュで塗りこめていく方法も採っていた。いずれにしても，黒い線の縁がかすれたりして乱れている方がボゼらしいと感じる意識が島民にはある）。歯部も同じように，アカシュと墨汁を塗る。日は中の底の部分に赤い紙を貼り，中に黒丸を入れ，内側の壁部は黒く塗るか，外側同様，アカシュと墨汁で縦線を入れる。口の中の赤い紙も口を開いた形に墨汁で縁どりし，周りはアカシュと墨汁で縦線を入れる。のど奥も描く[20]。目を取り付ける。上顎，下顎に歯を取り付ける（第19図）。ボゼマラにアカシュを塗る。ボゼメン，ボゼマラを乾燥させる（第20図）。

（４）ボゼ役とその決定

この項は，有川氏と穴澤氏からの情報による。ボゼメンの重さは，６～10kg程（濡れている時が10kg程）。暑い夏にボゼメンを被るため，ボゼ役は体力がないといけない（体力があれば壮年も可）。ボゼ役の３名は，当日になって，自治会長が決めるが，事前に誰がするのかは相談している。当日出ることができなくなっても，代わりの人がいる。ボゼ役が３名，補助が６名，太鼓をたたく人１人（太鼓役以外は，盆踊りに出ない）がいる。行事継承のため，ボゼ３体のうち，１体はベテラン，２体は新人が担当する。基準は，学園の先生１人，自治会の若い人２人（令和６年は20代と30代が１人ずつ）。４年目の学園の先生や，１人で２回以上ボゼ役をする人，また30回以上ボゼ役をしている人もいる。令和４年にボゼ役をした穴澤氏は「アカシュをつける時に，全員に付けるよう気を遣う」と述べていた。

（５）ボゼの着付け

旧暦７月16日の午前に，湯泊温泉付近にあるビロウ群落（第21図）から60枚程度のビロウ葉を採集する（第22図）。身に着ける部位ごとに，適する葉の大きさが異なり，大・中・小に分ける。ボゼに必要なビロウ葉は15～20枚ほどだが，不足することがないように多めに採集する。採集されたビロウ葉は，葉柄部分を切り落とし，葉の部分だけを利用する。ボゼ役は足に地下足袋をはき，膝か

ら下にビロウの葉鞘（第23図）（またはシュロの皮）をまき，細縄でくくる。有川氏によると，令和６年はシュロの皮（葉鞘）を使った。現在シュロの木は島に１本しかなく（第24図），背が高いので採集に危険が伴うため，10年以上前からビロウの葉鞘で代用している。シュロは黒っぽく，ビロウは赤っぽいが，受ける印象は変わらず，同じ感じの色である。太腿部，腰，腕，背中，胸と，首から下をすべてビロウ葉で覆い隠す。膝から先にビロウの葉鞘を巻く。手は素手である。ボゼ役にボゼメンを被らせ（第25図），アカシュを全身に叩きつける。手や足にもアカシュを塗る。ボゼメンのアカシュの赤色を出すために，口に水を含み，ボゼメンにふきかける。

（６）ボゼの出現と最後

旧暦７月16日の夕方，悪石島学園での盆踊り終了後に，呼び太鼓に導かれたボゼが３体登場し，ボゼマラについたアカシュを住民などにつけて，暴れ回った後，テラに戻る（第１章第２節を参照）。

テラに戻ったボゼ（役）は，ボゼメンを脱ぎ，足で踏みつぶし，分からないようにビロウの葉等で隠し，テラの裏山（小屋の裏）に納める。ボゼメンは，１回限りの物とされた[24]。

３　盆行事とボゼの歴史的変化

（１）盆行事の変化

有川氏によると，旧暦７月７～15日の盆踊りは，平成18（2006）年頃までは毎日踊っていたが，今は13日まで１日おき（７，９，11，13，14，15，16日）。７～13日が練習，14～16日は本番の踊り。過去にはこの盆踊りに男性のみが参加していた[25]が，現在はテラや悪石島学園での盆踊りに，女の子も参加し，少しずつ変化してきている。盆踊りの１つ「ハッパン大将」について，昭和50（1975）年頃の村田氏の報告[26]に，ハッパン大将を旧暦７月16日の演芸で踊り，復活したとある。その後しばらく踊られずにいたが，有川氏が，踊りを知っていた故宮永広氏から昭和50年代に教わった踊りの記憶を頼りに，悪石島学園の子供達に教え，平成29年から踊られている。現在は行事継承のため，悪石島学園の子供達は，盆踊りに参加し，学園の先生もボゼ役を担う。

（２）ボゼ登場の場所の変化

ボゼ登場の場所は，少なくとも２回は変わっている。（おそらく江戸時代以降，）「総代の家」に登場していたが，有川氏によると昭和50年代に「公民館」に変更した。確かに，昭和40（1965）年のクライナー氏の報告[27]と昭和55（1980）年の下野氏の記述[28]から，その頃までは「総代の家」だったことが分かる。佐藤氏[29]によると，その年の総代の家の庭で盆踊りやボゼが登場したが，個々人の負担を軽減するために，公民館に集約された。有川氏によると，令和３（2021）年に「悪石島学園のコミューン前」に変わった。その理由は，公民館では狭く，ボゼが暴れると，ツアーで人も来るので，けが人が出る心配があったからであり，コロナの影響ではない。

（３）ボゼの形態的特徴の変化

まずボゼの種類（名称や数）に変化がみられる。クライナー氏[30]によれば，昭和40年頃のボゼは３体で，１体はサガシボゼ（またはハガマボゼ）である。昭和50年の村田氏の報告[31]では，「赤ボゼ」２面，「サガシボゼ」１面作ったとあるが，昔はもっと多く，「アカボゼ（天狗面だったという）」４面，「ハガマボゼ」１面，「ウシボゼ（牛の面をつくり，赤毛布を胴にした中に２人入る。尾はガジュマルのヒゲで作り，口にはカヤ草をくわえさせたという）」１面の計６面を作った。ヒラボゼの名前が登場するのは，昭和57（1982）年の下野氏の著述[32]においてである。

以上で「アカボゼ」，「ウシボゼ」と現在では知られていないボゼの名前が挙がっているが，斎藤氏[33]と佐藤氏[34]は，奇妙な「ハダカボゼ」の報告もしている。ハダカボゼは，裸になって全身真っ黒に塗り，頭と腕にシュロ，腰にビロウの葉をまとい，ボゼマラを持っている。人を楽しませることが好きな人が時々やることがあった。関西のテレビ局がボゼをやらせてくれと交渉した結果，「ハダカボゼなら」ということになり，テレビ局が連れてきたお笑い芸人（吉本興業のたいぞう氏）が，平成14（2002）年に30年ぶりに復活させた。このハダカボゼは，鹿児島県発行の「グラフかごしま447号」（平成17年）のボゼ紹介写真左側の仮面を被っていない人物だと推察される（第26図）。有川氏も過去に，年上の方がハダカボゼをしているのを見たことがあるそうだ。もしかしたらハダカボゼは，村田氏の報告[35]にある，（ずっと以前にあっ

た）盆踊りの他の余興の出し物の１つ「ホウカイボウズ」かもしれない。ホウカイボウズは身体にアカ朱，顔にはヘグロを塗り，頭も仮装した異様な格好で，石を入れた椀を手ぬぐいで包んだものを振り鳴らしながら，「ハイマの国のボゼが出た，出た…」と歌いながら出てきて，滑稽な踊りであったという。

次にボゼの形・サイズ・材料の変化が挙げられる。有川氏によると，ボゼの形は，以前は，海岸集落，上集落（３班）に別れて作っていたため，各班で違ったが，今は同じ所（テラ）で作るから，同じ形になっている。サガシボゼと他のボゼとの区別は，大きさのみである。ボゼメンは以前より小さくなっており，それはボゼメンの材料のテゴの入手が難しくなってきたことに関わる。佐藤氏[36]は，昔は農作業用にテゴを自作して，古くなったものをボゼに使っていたが，現在（筆者註：平成18年頃）は既製品のテゴを買っており，そのテゴが小さいものだけだと指摘している。有川氏によると，令和６年はボゼ製作のため，テゴの１個は有川氏所有のものを使ったが，残りの２個は県本土のさつま町から購入した。

また久保氏[37]は「数が減り入手が難しくなったシュロの繊維は，昭和の初め頃までは全身を覆っていたものが，前腕と下肢を隠すだけに使われるようになり，近年ではビロウの葉鞘で代用されるように変化していった」と記述している。昭和50年の村田氏の報告[38]から，当時は，ボゼの目が渦巻線香の空き缶をほぼ半分のところで輪切りにして作っていたこと，履物は運動靴だったが，昔はアシナカ（筆者註：「足半」はかかとにあたる部分のない短小な草履のこと）を履いていたことが分かる。さらに渡山氏[39]は，過去にはボゼの目は段ボール，椀類での代用があったこと，ペンキでボゼメンの色を塗ることがあった[40]ことも指摘している。有川氏によると，目の形は，10年位前から同じ形だけでは面白くないので，違う形もでてきている（第４章第２節を参照）。

最後に，ボゼの印象も変化した。昭和38（1963）年のクライナー氏の写真，昭和40年と昭和50年の下野氏の写真のボゼ（第27～29図）は怖かったが，最近は優しくなったように見える。この理由を有川氏は「最近はボゼメンの色の赤・黒を丁寧に塗る。昔は大雑把で，白もあって怖かった」と言及する。

（４）ボゼの行動変化

第２章第２節で，ボゼの役割は「悪魔払い」で，誰にでもボゼマラを押し付けると紹介した。しかし昭和中頃のクライナー氏による調査[41]では，ボゼは女子供，特に若い女性を探して，ボゼマラで圧迫しているとある。川野氏は「黎明館の民俗部門の端末内「悪石島のボゼ（企画：鹿児島県，製作：民族文化映像研究所）」を昭和56年８月に撮影した際に，公民館内の女性をボゼがボゼマラで叩いていた。アカシュを付けるためだけではない。硫黄島のメンドン，山川のメンドン，宮古島のパーントゥなどの例を見ると，叩くという行為は重大な事実である。特に弱い力の女子・子供を悪霊から守るために叩きだし，アカシュによって守るのだ」と述べる。さらに川野氏[42]は，アジアの仮面文化にも目を向け，悪石島のボゼが，ラオスのサイヤブリー県パクライ郡サイヤムンクイ村の「ピー・ター・コーン（霊・目・仮面の意味。赤い大きな目がある竹の仮面を付け，男根状の棒で女性を突き，悪霊を払う）」にも類似すると指摘している。

それに対し，令和以降の渡山氏の報告[43]では「ボゼがボゼマラでアカシュを付けている動作が“突いている”，“叩いている”と誤解されて観察された。ボゼに扮した経験者によると，隠れる人にアカシュを付けるときは，伸ばさないと届かないので棒の先を伸ばして付ける。子供や若い女性だけを怖がらせている訳ではない。赤シュイは誰にでも付ける。子供や女性は恐がって逃げるから面白いのだ」と指摘している。実際に，令和６年に筆者が見たボゼは，男女構わずにボゼマラを付けているようであり，叩いたり，突いたりはしていなかった。また有川氏も，「ボゼがアカシュをつける時はボゼマラや体を付けてくる。アカシュを付けたり，驚かせるために抱きつくことはある。ボゼマラの先端をすりつけはしない。ボゼマラを差し出すと危ない（過去にけが人が出た）ので，十数年前からやらなくなった」と言及している。これらのことから，ボゼがボゼマラで「突く・叩く」という行動は現在ないようだ。

（５）ボゼの認知度・民俗的価値の高まり

十島村のホームページ内の「悪石島のみどころ[44]」の最初に「ボゼ祭り」の紹介があり，ボゼが悪石島の象徴になっている。今回のボゼツアー行程表にも「ボゼ祭り」という記述があり，「悪石島の盆踊り」とは記載されていない。この「ボゼ祭り」

という言葉に対しては異論もあり，「島民の中には本来「ボゼ祭り」という表現はしないという者もいる[45]」，「ボゼは盆の最後に登場する仮面神であり，独立した祭りが存在するわけではない[46]」などの指摘もある。久保氏も「「ボゼ祭り」という言葉は旅行会社や島外の人がそう呼んでいるだけで，島民が「ボゼ祭り」と言うことは私が取材した限りなかった。寧ろそのような呼び名を使うと島民から注意されたほどだった。島民にとっては，盆行事の最後に登場するボゼなのだ」と述べる。また川野氏も，ボゼの出る盆が基本であり，お盆の中でボゼを位置付けることが大事だとしている（第４章第１節を参照）。「ボゼ祭り＝ボゼが主役のお祭り」と認識されがちであるが，ボゼの認知度が上がり，分かりやすい表現を探した結果の言葉が「ボゼ祭り」なのだろう。

ボゼが現れる「悪石島の盆踊り」は，平成３（1991）年３月22日に県指定文化財に[47]，平成29年３月３日に「悪石島のボゼ」は国指定重要無形民俗文化財に指定され，そして平成30（2018）年11月29日に「来訪神仮面・仮装の神々」として硫黄島のメンドン，甑島のトシドンと共にユネスコ無形文化遺産へ登録された。このようなボゼの民俗的価値の高まりにより，年に１回，盆に１回限りだったボゼは，島外へのPRや，年に２回の登場を可能にした。平成２（1990）年10月に，第32回九州地区民俗芸能大会（長崎県）の鹿児島県代表としてボゼ２体が登場[48]（第30図）。平成７（1995）年３月25日に，島の祭典「アイランダー」（東京都）での「島のＣＭタイム」にボゼ２体が登場[49]。平成27（2015）年11月３日に，鹿児島国民文化祭（鹿児島市）にボゼ２体が登場。平成30年11月３日開催の「フェリーとしま２就航記念　第３回文化の祭典　セブンアイランド2018（村民文化祭）」（鹿児島市）に登場した。また悪石島で，お盆以外に登場した例もある。平成11（1999）年７月の「パラダイストカラ・イン・アクセキ（十島村に属する７つの有人島の人達が，悪石島に会して親しく交流するイベント）」にて，他の島の人達にもお披露目しようということで，サプライズでボゼが登場[50]（第31図）。平成21年７月22日の皆既日食の前夜に２体で登場[51]。（有川氏によると）平成31年６月８日のユネスコ無形文化遺産登録記念行事で悪石島学園の体育館に２体が登場した。

４　資料としてのボゼとその特徴

（１）文化施設のボゼ資料

先述したように，通常，ボゼメンは最後に踏み潰されて残らないが，いくつかのボゼ資料（ボゼメン・ボゼマラ）は文化施設で展示・保管されている。国内で現存するボゼ資料は，黎明館，鹿児島県立博物館（第32図），ミュージアム知覧（第33図），十島村歴史民俗資料館（中之島）（第34図），サザンクロスセンター（与論島）（第35図），国立民族学博物館（大阪）の６ヶ所にある。川野氏によると，国外では，ドイツのボン大学の博物館にもある。

以下で国内のボゼ資料を紹介するが，ボゼメンとボゼマラを指す場合，第１～２表を基に“ボゼメン１”，“ボゼマラ１”などと記す。またボゼメンとボゼマラのセットを指す場合は，“式”を用いる。

まず黎明館には，ボゼが10式あるが（ボゼメン１～10，ボゼマラ１～10：第36～45，52～61図），昭和47（1972）年，昭和50年，昭和56年，平成２年，平成27年と計５回で受入れた。昭和56年のボゼは，川野氏が「悪石島のボゼ」の映像を撮るために悪石島に渡ったときに，持って帰ってきた。川野氏が「黎明館に展示したい」と申し出た際，島民から「（お盆だけでなく）毎日ボゼが出ているようでは良くない」という反対意見が強く出たため，ボゼを展示する意義を説き，「県民に見てもらうために黎明館で展示するなら」ということで，ようやく了承を得た。平成２年のボゼは，「九州地区民俗芸能大会（長崎市）」開催後の，平成27年のボゼは「第30回国民文化祭　かごしま2015（鹿児島市）」開催後の受入資料である。10式のボゼのうち，展示場に展示中のものが２式あるが，残りは収蔵庫に保管されている。

次に鹿児島県立博物館で，１式のボゼ（ボゼメン11，ボゼマラ11：第32，62図）が，平成30年よりリニューアルの目玉資料として，展示場３階に展示されている。久保氏によると，このボゼは平成29年9月7日の盆行事で使用されたもので，有川氏との交渉，資料の補修・燻蒸を経て，展示されている。

ミュージアム知覧のボゼ３式（ボゼメン12～14，ボゼマラ12～14：第46～48，63～65図）は，知覧の地域行事「ソラヨイ」資料と共にシアタールームにて展示中。平成5(1993)年4月24日の開館のため，悪石島に行って打診し，平成4年に受入れた[52]。

十島村の中之島にある十島村歴史民俗資料館にも，実際に使用された[53]ボゼ３式（ボゼメン15～

17，ボゼマラ15～17：第34図）が展示してある。受入時期は平成５年である[54]。

与論町のサザンクロスセンターでは，ボゼ２式（ボゼメン18～19，ボゼマラ18～19：第49～50，66～67図）が展示してある。平成５～14（1993～2002）年に与論町が管轄していた頃のボゼと考えられる。

大阪の国立民族学博物館にもボゼメン１面（ボゼメン20：第51図）が収蔵されている。昭和52（1977）年に受入れ，令和６年の特別展示「日本の仮面」にて展示された。

（２）ボゼの特徴

ここでは，文化施設のボゼメンとボゼマラの特徴（第68図：第１～２表の項目ごと）を中心にまとめる。残念ながら，実測調査の数値データが全て揃っていないことから，時代的な変化等を数値からとらえることは不可能なので，数値による比較は行わない。しかし実見による特徴把握が可能なもの，有川氏から得た情報も有益であるため，以下に記す。

ボゼの頭の形は，ヒラボゼの平べったい形（以後，ヒラボゼ系）とハガマボゼの羽釜のような丸い形（以後，ハガマボゼ系）の２種類に分類できる。今回の調査では，ヒラボゼ系のボゼが圧倒的に多く，ハガマボゼ系と認識できるのはボゼメン10のみだった。令和６年のボゼ３体は頭が丸い形であったため，ハガマボゼ系に分類できるかもしれない（第69図）。

まゆげとまつげ（③・④）については，過去の研究で，眉や瞼との記述もある[55]が，有川氏によると，上の羽根が「まゆげ」で，下の羽根が「まつげ」だ。どちらにも縦線模様がある。

目（⑤）の大きさは，材料（磯アマメテゴのフタや椀など）の直径に関係する。有川氏によると，目の形が丸でないといけないという決まりはなく，10年位前から同じ形では面白くないということで，竹で目を作っているとのことだった。確かに，平成29年のボゼメン11の目（第70図）は（正面から見たら丸だが，横から見たら）円錐形をしている。第１表には載っていないが，令和元年のボゼの目は，それぞれが異なり，円錐形，紡錘形（人間の目のようなアーモンド形），四角形と３種類もある（第71図）。令和６年のボゼの目は，２体が丸形，１体が紡錘形を有していた。目の内側部分の模様には，黒色のもの（ボゼメン１など）と赤土と墨汁による縦線模様があるもの（ボゼメン２など）の２種類がある。

瞳（⑥）の形は，黒丸（ボゼメン４など）でよく表現されるが，それ以外に，白抜き黒丸（ボゼメン14），二重丸（ボゼメン1），紡錘形（ボゼメン12），人の目の形（第1図：右のボゼ）もある（第72図）。

ボゼメンの両側面には，耳（⑦）があり，その下（時々さらに前面）の突起は耳たぶ（⑧）（第73図）を表す。ボゼメン12～14のように，耳たぶのないボゼもいる。耳にも耳たぶにも，縦線模様がある。

鼻（⑨）は棒状に長く，その先（鼻先）は丸まっていて円形に近い形である。鼻にも縦線模様があり，鼻先に十字模様を描き，その線を延長させて４本線を表す例（ボゼメン１：第74図）もある。

顎（⑪）には上下があり，縦線模様もある。

口（上下歯先端間：⑫）の縦幅が大きい方が口を大きく開けているように見える。

１本の歯（⑫）を表現するため，顎部分の上下に，シタミテゴの竹ヒゴ部分２本を残している。歯にも縦線模様があり，赤土と墨汁の色が横方向に向かって１本ずつ交互のもの（ボゼメン１～８，12，14，18～19），上の歯は黒色で下の歯は交互のもの（ボゼメン13），上の歯が黒色で下の歯が赤土色のもの（ボゼメン９～10），規則性のないもの（ボゼメン11）の４種類がある（第75図）。歯の欠損は，実際に使われて壊れたためだろう。

のど（⑬）は，口の中にある紡錘形の赤い部分で表現される。のどの上下に描かれている縦線・三角模様（ギザギザ模様）は，有川氏によると「鋸歯文」で，まじないの意味がある。のどに鋸歯文がないもの（ボゼメン１，18～20：第36，49～51図）もある。

「のど奥（⑭）の黒く縁取りされた赤い楕円形は「のどちんこ」であり，黒の楕円形は「のど穴」だ」と有川氏はいう。前者の例は少なく，ボゼメン12（第45図）のみ。のど奥は二重で描かれているもの（ボゼメン７，18～19：第42，49～50図）もあれば，表現がないもの（ボゼメン20：第51図）もある。

目穴（⑮：第76図）とは，ボゼ役がボゼメンの中から外を見るための穴で，その穴はテゴで作られた上顎と上の歯に隠れ，外からは見えにくいようになっている。黎明館，鹿児島県立博物館，十島村歴史民俗資料館のボゼメンが，目穴を有する。この目穴の数・形・大きさはバラバラである。目穴の数は１～４個で，ほとんどの目穴の形は長方形だが，ボゼメン５は丸形である。目穴の数の差について，有川氏に聞いたところ，目穴は１個でも良いらしく，中から見やすいところに穴を開け

る。穴を多く開けているものは，骨組みを壊さないためである。

ボゼマラ（⑯）は，ボゼの持つ朱色の棒。棒に薄く黒い線のようなものも見られたが，有川氏によるとボゼマラに模様はない。

5　地域行事の継承のために

今回のボゼツアーは，観光客が盆踊りやボゼの登場を見学（体験）し，十島村の食材を使った料理，観光地巡り，工芸体験，子供達による演奏会での交流を楽しみ，島のお土産を買い，「また十島村に行きたい」，「ボゼを見たい」と思わせるものだった。

「十島村にとってボゼツアーはどうなのか」を松下氏に聞くと，「ツアーは十島村にとって，観光・移住促進，島外者との交流，経済効果のメリットがある。また（年によって島の状況も異なるが，）悪石島・宝島・小宝島の３島の住民に加え，ツアー客の食事提供を令和６年は中之島の住民が協力し，３島では，観光ガイドや伐採のための現業職，自治会や女性の会など，島内のすべての団体が協力している。そのため，旧暦と新暦のお盆の日が重なっていたり，日が近かったりすると，島民も忙しく，ツアー協力者がいないということがある。また，島内の高齢化も進んでおり，島民の協力ありきのツアー実施では難しい状況となりつつある。そこで近年のツアー事業では試行錯誤しながら，島民に頼りすぎない形を追求している。加えて国と県の事業である「特定有人国境離島地域社会維持推進交付金事業」を利用することで，ツアーの村負担分費用が補われている。オーバーツーリズムにならないよう，ツアーの参加者数は調整されている」との回答を得た。また有川氏に「ボゼツアーで多くの観光客が（旧暦の）お盆の時期に来て，住民にとって迷惑ではないか。盆行事を維持する上で心配なことはないか」との質問をしたところ，「ツアーは迷惑ではない。最初は見世物でどうかと思ったが，人に見せることで，広めてくれる。多くの人が見ることで，ボゼ役もやりがいがあるので良い。行事を知っている人が少なくなるのが心配だ。真剣になって，覚えてくれるのか。時代でボゼの形も変わっていく。できるだけ昔のままで保存したい」とのことだった。事実として，第３章でまとめたように，盆行事やボゼは時代によって変化しつつある。しかし，行政[56]と地域住民が，試行錯誤しながら協力し実施しているボゼツアー（文化観光）は，盆行事（地域行事）のPRや参加意欲の維持，地域おこしに貢献している。

また「悪石島の盆踊りとボゼ」が県や国の文化財指定を経て，「ユネスコ無形文化遺産」に登録されていることも，地域行事の継承を支えている。松下氏は「なんとなく，悪石島の島民が以前よりもっと，ボゼという存在を大切にするようになったと感じる。門外不出のボゼを島民全員で守りながらも，文化継承のために，若者にしっかり引き継がれる光景を多く見るようになった」と述べている。確かに，新人がボゼ役を担当し，悪石島学園の子供達が盆踊りに参加していることから，地域行事が若者に継承されつつある。この子供達の行事参加は，「文化財伝承活動（学校行事や総合的な学習の時間などで，地域と一体となって行事を継続するための活動）[57]」として位置づけられている。

このような活動を行っている所は県内でも多く，他にも学校以外で住民（町内会など）が中心となって行う行事なども多く存在する[58]。しかし，既知の事実として，地域行事の多くは，担い手不足などにより，存続の危機にある。筆者が，お祭りなどの県内の（文化）行事の現地調査（写真撮影や住民との会話など）に行くと，住民や主催者などから「担い手不足で継続が難しくなってきている」，「多くの人に見てもらいたい」，「材料集めが大変だ[59]」などの声を聞く。地域行事を継続する解決方法はないのだろうか。

「悪石島の盆行事」のような地域行事や文化施設で展示・保存している関連資料は，海外からも注目を浴びる「文化資源（文化財）」だ。観光の面では，入手したプリンセス・クルーズのパンフレット[60]に「青森ねぶた祭」，「高知のよさこい祭り」，「徳島の阿波おどり」を巡る令和８（2026）年のツアーの紹介があり，国内のお祭りは人気がある。また令和６年３月６日朝日新聞デジタルの記事[61]には「令和５年に鹿児島港に寄港した訪日クルーズ船の回数は78回と全国３位であり，離島観光の需要も拡大している」という情報があり，海外客は鹿児島，そして離島にも興味を持っていることが分かる。さらに最近では，離島の地域行事である「甑島のトシドン」や「硫黄島のメンドン」を見学するツアーもあり，より深い文化体験への需要が高まっている。文化資源の面でも，黎明館への来館者が地域行事の展示資料（文化資源）を見

て興味を持ち，展示解説員の私達に質問をすることから，その関心の高さが窺える。

以上のことから，ボゼツアーのような「地域行事を組み入れた文化観光」や，文化施設での「文化資源の活用（展示や説明等による情報提供）」の推進が，地域行事の理解やその継承に貢献するのではないか。

おわりに

最後に展示解説員の仕事も，地域行事の継承に関わっていることを紹介したい。展示解説員は，文化施設・史跡等を訪れて学ぶ研修，個人での地域行事の見学や文化イベントへの参加などを通して，鹿児島の歴史や文化についての知識や実体験を得ており，これらが解説（説明）・質問対応や解説イベントなどで生かされている。例えば，展示場の「ボゼ」を見ていた来館者へ，筆者がボゼツアーで聞いた話や実体験を踏まえた解説を行うと，「悪石島に行ってみたい」，「ボゼを見たい」との声を聞く。解説が，来館者の現地への来訪や地域行事への興味・関心へのきっかけになっている。本稿も「悪石島の盆行事」を含めた鹿児島の地域行事や文化に興味を持ち，現地で行事を見て住民と交流し，それらの素晴らしさを知ってもらいたいという思いで執筆した。このような日々の解説や調査研究報告が，地域行事の継承に繋がっていることを紹介し，本稿の終わりとしたい。

謝辞：情報提供，資料調査ならびに成稿にあたっては，多くの方々のご教示，ご協力をいただきました。最後に，当調査研究を報告する機会をくださった当館職員の皆様にも，心から感謝申し上げます。

以下，文末にご芳名を記して感謝の意を表します。

（五十音順　敬称略）：有川和則（悪石島盆踊り保存会会長），金本直子（鹿児島県立博物館学芸主事），川野和昭（元黎明館学芸課長），久保紘史郎（伊集院高校教諭：元鹿児島県立博物館学芸主事），花野光ヶ丘町内会，十島村教育委員会，十島村歴史民俗資料館，町岡安博（ヨロン島観光協会事務局長），松下宗磨（十島村役場土木交通課航路対策室主事），ミュージアム知覧

註

（1）有川氏によると，悪石島盆踊り保存会には悪石島に住所がある15～70歳以下の男性，約30人が所属し，有川氏が会長，総代が副会長。ボゼづくりと盆踊りの活動をしている。

（2）及川高「ボゼの現在をいかに描くか － 悪石島における盆行事の現代的動態をめぐって －」（『沖縄民俗研究』第29号，沖縄民俗学会編，2011年）27頁；佐藤有「仮面の空間-悪石島・ボゼ祭りを事例に」（『神戸文化人類学研究』第１号，神戸文化人類学研究編集事務局［編］，2007年）51頁：註７

（3）キャンプ場を利用したボゼ見学に関する記録は，サロメリー氏の『悪石島のボゼ 彷徨記１』（彷徨出版，2024年）とブログ：https://daydreamering.com/（2024年12月５日訪問）を参照

（4）有川氏によると，過去には，盆踊りの時に総代と本ボーイが羽織袴で床の間を背にして正座でボゼを待っていたが，2年前からは行っていない。

（5）清水哲男『トカラへ』（再海社，2001年）160～161頁では，トランシーバーでのやりとりも記述されている。

（6）有川氏によると，山側，海側からボゼが来るという概念はない。以前，ボゼが出現した総代の家のオモテとウラの入口（２ヶ所）に出来する。

（7）渡山恵子「盆の観念とボゼについて考える」（鹿児島民俗学会例会レジュメ，2018年）１～６頁；渡山恵子『悪石島民俗誌：村落祭祀の世界観』（南方新社，2021年）105～110頁

（8）来訪神行事保存・振興全国協議会事務局編集・石垣悟監修『来訪神ガイドブック』（来訪神行事保存・振興全国協議会事務局，2021年）122頁

（9）十島村誌追録版編集委員会編『十島村誌：追録版』（十島村誌追録版編集委員会編，2019年）167頁；盆踊りの歌詞は，十島村『十島村誌』（十島村誌編集委員会，1995年）1061～1066頁を参照

（10）久保紘史郎「悪石島仮面神ボゼに利用される植物」（『鹿児島県立博物館研究報告』第37号，2018年）68～69頁

（11）下野敏見『トカラ列島民俗誌』（第一書房，1994

年）67頁；黎明館『企画特別展 南九州の仮面』展示図録（黎明館，1992年）94頁；川野氏は，黎明館企画特別展『南九州の仮面』，『鹿児島・竹の世界』，『樹と竹』を担当し，竹や仮面との関連からボゼを紹介している。

(12)渡山恵子「悪石島のボゼに関する考察（２）盆の観念とボゼ」（『鹿児島民俗』第154号，「鹿児島民俗」編集委員会編，2018年）17～19頁

(13)平辰彦『来訪神事典』（新紀元社，2020年）24頁；国立民族学博物館『日本の仮面』（国立民族学博物館，2024年）123頁；文化遺産オンライン「悪石島のボゼ」https://bunka.nii.ac.jp/ special_content/intangible/209809（2024年12月５日訪問）

(14)渡山，前掲書，118～119頁

(15)久保，前掲論文，67～69頁

(16)資料カードでは，数えの15～60歳までの男性とあるが，有川氏によると今は15～70歳以下の男性であることから，訂正した。

(17)村田熙「悪石島の盆踊とボゼ」（『鹿児島県文化財調査報告書』第22集，鹿児島県教育委員会編，1975年）38頁；斎藤潤『吐噶喇列島：絶海の島々の豊かな暮らし』（光文社，2008年）193頁

(18)佐藤，前掲論文，36頁

(19)写真は黎明館所蔵のシタミテゴ（民3947）。サイズは高さ：37cm，直径：25×28cm。

(20)写真は黎明館所蔵のアマメテゴ（民3967）。蓋のサイズは高さ：６．７cm，直径：約12cm。

(21)及川，前掲論文，36頁にて，麻紐とビニールテープの記述がある。

(22)資料カードでは，上は「眉」，下は「上まぶた」とあるが，有川氏に確認したところ，上は「まゆげ」，下は「まつげ」であるため，訂正した。

(23)のど奥について，渡山，前掲書，103頁では，「舌」と「咽頭」とあるが，有川氏によると，「のどちんこ」と「のど穴」を表している。

(24)渡山，前掲レジュメ，１頁

(25)下野敏見『南日本の民俗文化誌 ３（トカラ列島）』（南方新社，2009年）326頁

(26)村田，前掲論文，39，44～45頁

(27)ヨーゼフ・クライナー「トカラ・悪石島の仮面行事」（『民族學研究』第30巻第３号，日本民俗学会編，1965年）255頁；クライナー氏が，学史上最初にボゼについて言及した。

(28)下野敏見『南九州の民俗芸能』（未来社，1980年）114頁

(29)佐藤，前掲論文，51頁：註３

(30)クライナー，前掲論文，255～256頁

(31)村田，前掲論文，45頁

(32)下野敏見「南日本のカミの出現」（『まつりと芸能の研究』第１集，1982年）377頁

(33)斎藤潤『島で空を見ていた：屋久島・トカラ・奄美・加計呂麻島の旅』（アメーバブックス新社，2010年）138頁；斎藤潤『ニッポン島遺産』（実業之日本社，2016年）24頁

(34)佐藤，前掲論文，53頁：註14

(35)村田，前掲論文，45頁

(36)佐藤，前掲論文，45頁

(37)久保，前掲論文，69頁

(38)村田，前掲論文，46頁

(39)渡山 2008，前掲論文，13頁；渡山 2018，前掲論文，12頁；渡山，前掲書，104頁

(40)有川氏によると「パラダイストカラ・イン・アクセキ」の時に塗ったが，今は違う。

(41)クライナー，前掲論文，255頁

(42)川野和昭「ボゼの遠来 ― ボゼはどこからやってきたのか ―」（悪石島のボゼ ユネスコ世界文化遺産登録記念式典講演資料，2019年６月１日）４～７頁

(43)渡山 2018，前掲論文，20頁；渡山，前掲レジュメ，５～６頁；渡山，前掲書，118～119頁

(44)十島村ホームページ「悪石島のみどころ」http://www.tokara.jp/tourism/profile/akusekijima/（2024年12月５日訪問）

(45)佐藤，前掲論文，51頁：註１

(46)及川，前掲論文，27，46～47頁

(47)十島村誌編集委員会，前掲書，1701頁

(48)斎藤2008，前掲書，189頁；十島村誌編集委員会，前掲書，1709頁 写四一六－68

(49)上村晋一「異形の神・首都に出現 ～悪石島のボゼ」（『しま』第41巻第１号，日本離島センター，1995年）31～34頁；斎藤2008，前掲書，189頁

(50)斎藤2008，前掲書，188～189頁；斎藤 2016，前掲書，23頁

(51)斎藤2010，前掲書，139頁

(52)ミュージアム知覧からの情報。

(53)小島摩文「南西諸島の来訪神」（『文化遺産の世界』第34号（WEB 上での論文：2019年）https://www.isan-no-sekai.jp/feature/34_05（2024年12月５日訪問）では，小島氏が十島

村歴史民俗資料館で寄贈を受ける際の担当だったとある。

(54)十島村誌編集委員会，前掲書，1710頁；十島村教育委員会からの情報。

(55)佐藤，前掲論文，35頁と下野敏見『南日本の民俗文化写真集 3（トカラ列島）』(南方新社，2010年）187頁では，眉と瞼。渡山，前掲書，103頁では，眉と瞼・睫毛とある。

(56)ツアーのような「文化観光」以外にも，行政は地域行事継承のため，文化財保護や文化振興活動を行っている。例えば，鹿児島県は「鹿児島県文化財保存活用大綱」の策定，『かごしまの祭り・行事調査事業報告書』や『鹿児島県文化財調査報告書』の発行，「かごしま文化財事典（WEB版）」の運用，「かごしま無形民俗文化財（民俗芸能）伝承活動表彰」などを行い，鹿児島市は「鹿児島市郷土芸能保護事業（地域の地域文化継承を支援するため，各保存会の運営費や用具補修費の財政補助を行う）」や「かごしままちなか文化彩（ふるさと芸能祭）の開催（令和６年10月26日に，鹿児島市のセンテラススクエア会場にて５つの民俗芸能団体が参加）」などを行っている。

(57)鹿児島県教育委員会ホームページ「学校等における文化財伝承活動等の紹介」https://www.pref. kagoshima.jp/ba08/ kyoiku-bunka/ bunkazai/soudan/ denshou/26gakkou touniokeru.html（2024年12月５日訪問）

(58)例えば，筆者の地元（鹿児島市花野光ヶ丘）の町内会は，秋に「十五夜祭（綱引きと相撲）」を実施する。令和６年９月21日には，30人くらいの子供達が公園に集まり，行事を楽しんでいた。副会長の奥山嘉次郎氏から「行事は40年くらい続いており，子供に楽しい思い出を残したいので続けている」と聞いた。

(59)例えば「曽我どんの傘焼き（鹿児島市）」では，材料（和傘）入手が難しくなり，岐阜県和傘振興会や個人などから和傘を提供してもらっている。

(60)令和８年度プリンセス・クルーズのパンフレット，25頁

(61)令和６年３月６日朝日新聞デジタル「訪日クルーズ船の寄港，鹿児島港が全国３位　離島観光の需要も拡大」https://www.asahi.com/ articles/ASS357RDZS32TLTB001.html（2024年12月５日訪問）

図表	所蔵館	名称	受入	製作地	頭の形	①	②	③			④			⑤				⑥		⑦			⑧			⑨			
								まゆげ			まつげ			目				瞳		耳			耳たぶ			鼻			
ボゼメン番号	(資料番号)		年			縦	横幅	縦	横	模様	縦	横	模様	直径(外)	奥行	模様(中)	模様(外)	直径	形	縦	横	模様	縦	横	模様	長さ	直径	鼻先	模様
36	黎明館	ボゼの面	1972	—	ヒラボゼ系	160	80	80	45	16本	45	30	7本	17	8	黒	9本	5	◉	30	13	3本	10	15	5本	37	4	4×4.5	4本
1	(民170)							75	45	14本	45	30	10本	15	8	黒	13本	4		25	14	4本	10	17	3本				
37	黎明館	ボゼの面	1975	十島村	ヒラボゼ系	118	70	60	21	8本	42	23	10本	16	9	16本	13本	4	⊙	32	10.5	3本	13.5	13	3本	25	4	7×7	5本
2	(民439-1)							60	30	9本	41	21	9本	16	9	15本	11本	4		30	14	3本	12	13	2本				
38	黎明館	ボゼの面	1975	十島村	ヒラボゼ系	110	80	65	33	17本	51	33	9本	16	10	黒	12本	4.5	⊙	30	12	6本	10	5	3本	34	4	4×6	4本
3	(民439-2)							65	36	12本	50	28	13本	15	8	黒	14本	4		33	12	3本	10	6	3本				
39	黎明館	サガシボゼ	1981	悪石島	ヒラボゼ系	140	60	60	30	8本	40	25	8本	14	7	黒	14本	4	⊙	30	17	5本	6	10	5本	35	6	9×9	4本
4	(民1795)							65	30	8本	45	27	8本	14	7	黒	7本	4		30	18	5本	11	13	4本				
40	黎明館	ボゼ	1981	悪石島	ヒラボゼ系	140	70	60	40	7本	50	28	5本	16	9	黒	10本	4	⊙	25	15	3本	12	9	2本	25	6	5×5	5本
5	(民1796)							65	35	5本	49	33	5本	16	9	黒	11本	4		26	15	3本	13	10	2本				
41	黎明館	ボゼ	1981	悪石島	ヒラボゼ系	155	110	73	42	7本	59	32	5本	15	7	黒	12本	4	⊙	46	14	3本	10	7	3本	38	4.5	6×6	4本
6	(民1797)							81	40	7本	63	29	5本	14	7	黒	16本	4		45	21	3本	10	7	4本				
42	黎明館	ボゼメン	1990	悪石島	ヒラボゼ系	120	85	70	35	6本	45	20	4本	15	10	17本	12本	4.5	⊙	30	10	3本	10	8	3本	22	6	6×6.5	4本
7	(民2758)							60	35	7本	40	25	5本	15	10	15本	15本	4		30	15	3本	10	12	2本				
43	黎明館	ボゼメン	1990	悪石島	ヒラボゼ系	130	70	60	33	6本	40	22	5本	15	7	11本	—本	4	⊙	34	8	3本	6	10	2本	28	7	4×4	4本
8	(民2759)							55	35	7本	40	25	4本	13	7	10本	—本	4		31	9	3本	7	10	3本				
44	黎明館	ボゼメン	2016	悪石島	ヒラボゼ系	113	90	60	37	6本	50	24	4本	12	6.5	8本	8本	3	⊙	38	15	3本	8	11	2本	35	6.5	5×5	4本
9	(民 参考資料)							60	36	7本	50	26	4本	12	6.5	8本	8本	3		40	12	3本	6	10	2本				
45	黎明館	ボゼメン	2016	悪石島	ハガマボゼ系	143	60	73	39	6本	42	25	4本	12	3.5	10本	10本	3	⊙	37	15	4本	5	6	2本	32	4.5	4×6	3本
10	(民 参考資料)							70	36	8本	43	22	6本	12.5	4	11本	11本	3		35	14	2本	7	10	2本				
32	鹿児島県立	悪石島の	2017	悪石島	ヒラボゼ系	140	52	70	47	10本	43	31	7本	16.5	7.5	8本	8本	1	⊙	41	16.5	3本	14	7	3本	29	7	6×6	3本
11	博物館	ボゼ						53	47	11本	45	34	6本	16.5	5	8本	8本	1.5		44	16	4本	12	6	3本				
46	ミュージアム	ボゼの面	1992	悪石島	ヒラボゼ系	143	72	70	37	8本	46	26	5本	15	7	黒	9本	3×4	◇	33	13	3本	—	—	—本	31	6	6×4	4本
12	知覧							70	36	9本	48	26	5本	14.5	6	黒	12本	2.5×4		35	14	3本	—	—	—本				
47	ミュージアム	ボゼの面	1992	悪石島	ヒラボゼ系	125	45	55	29	9本	40	24	6本	12	6	黒	10本	2.5	⊙	20	9	2本	—	—	—本	25	6	5×5	4本
13	知覧							60	30	9本	40	24	6本	12	6	黒	10本	2.5		20	9	3本	—	—	—本				
48	ミュージアム	ボゼの面	1992	悪石島	ヒラボゼ系	121	78	55	32	9本	40	25	7本	12	6	黒	11本	3.5	◎	35	9	3本	—	—	—本	19	6	7×7	4本
14	知覧							60	29	9本	35	25	6本	12	7	黒	10本	4		30	11	3本	—	—	—本				
34	十島村歴史	ボゼ面	1993	悪石島	ヒラボゼ系	150	135	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本	—	⊙	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本
15	民俗資料館							—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本	—		—	—	—本	—	—	—本				
34	十島村歴史	ボゼ面	1993	悪石島	—	130	80	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本	—	⊙	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本
16	民俗資料館							—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本	—		—	—	—本	—	—	—本				
34	十島村歴史	ボゼ面	1993	悪石島	—	100	90	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本	—	—	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本
17	民俗資料館							—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本	—		—	—	—本	—	—	—本				
49	サザンクロス	ボゼ	1987	悪石島	ヒラボゼ系	—	—	—	—	7本	—	—	5本	—	—	8本	—本	—	⊙	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	4本
18	センター		-1997					—	—	8本	—	—	4本	—	—	9本	—本	—		—	—	—本	—	—	—本				
50	サザンクロス	ボゼ	1987	悪石島	ヒラボゼ系	—	—	—	—	6本	—	—	7本	—	—	10本	—本	—	⊙	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	4本
19	センター		-1997					—	—	6本	—	—	6本	—	—	9本	—本	—		—	—	—本	—	—	—本				
51	国立民族学	ボゼの面	1977	悪石島	ヒラボゼ系	116	87	—	—	9本	—	—	7本	—	—	黒	—本	—	⊙	—	—	—本	—	—	—本	—	—	—	—本
20	博物館							—	—	9本	—	—	7本	—	—	黒	—本	—		—	—	—本	—	—	—本				

第１表　ボゼメンの法量

図表	所蔵館	名称	受入	⑩			⑪		⑫				⑬			⑭		⑮				備考
				顎			口		歯				のど			喉奥		目穴				
ボゼメン番号	(資料番号)		年	縦	横	模様	縦	横	縦	横	本数	(欠損)	縦	横	模様	縦	横	数	縦	横	形	
36	黎明館	ボゼの面	1972	6	44	7本	42	44	4	2	14本	(1本)	9	30	×	1.5	7	2個	2	7	長方形	目の模様(外)は赤字に縦線,目の縁が黒
1	(民170)			5	40	14本			5	2	13本	(7本)							1.5	6		瞳が◉で外円は直径9cm, 鼻先が十字模様, のどの模様なし
37	黎明館	ボゼの面	1975	8	35	14本	28	35	5	1.5	13本	(1本)	9	24	16本	3	7	2個	1	2	長方形	ボゼマラ1とセット,展示場右のボゼ
2	(民439-1)			8	30	12本			4	1.2	12本	(0本)			16本				1	2		
38	黎明館	ボゼの面	1975	8	32	16本	27	32	5	2	14本	(0本)	13	25	9本	3	9	3個	2	1～2	長方形	
3	(民439-2)			6	33	15本			5	1.5	13本	(0本)			8本							
39	黎明館	サガシボゼ	1981	6	35	15本	45	35	5	2	15本	(0本)	9	25	7本	2.5	8	1個	2.5	9	長方形	目穴は大きく1つ,鼻先が太く丸い
4	(民1795)			8	32	7本			8	2	14本	(2本)			8本							
40	黎明館	ボゼ	1981	6	48	16本	30	52	5	1.5	22本	(0本)	10	22	8本	2	5	2個	1	2	丸	歯の数が多い
5	(民1796)			7	52	17本			5.5	1	23本	(5本)			9本				1	2		
41	黎明館	ボゼ	1981	6	33	7本	38	35	5	1.3	14本	(0本)	17	25	9本	3	7	2個	1.5	2	長方形	ボゼマラ6とセット,展示場左のボゼ
6	(民1797)			7	35	14本			6	1.6	14本	(6本)			7本				1.2	3.5		
42	黎明館	ボゼメン	1990	9	35	8本	30	42	8	1	15本	(1本)	15	24	9本	1.5	4	4個	4	2	長方形	喉奥が二重(縦:12cm×横:7cm)
7	(民2758)			7	35	8本			6	1	14本	(0本)			7本							目穴が横に14cm,4つに分かれ,1つずつは横幅2cm程
43	黎明館	ボゼメン	1990	8	40	8本	36	40	6	2	12本	(0本)	15	14	8本	4	6	3個	2～3	2	長方形	
8	(民2759)			10	32	6本			8	2	12本	(0本)			8本							
44	黎明館	ボゼメン	2016	5.5	30	15本	33	40	3	2	15本	(1本)	25	27	8本	8	13	4個	1.5	2	長方形	目が楕でできている
9	(民 参考資料)			5.5	42	14本			3	2	13本	(0本)			5本							歯が短い,歯は上が黒のみ・下は赤土色
45	黎明館	ボゼメン	2016	8	45	15本	35	45	3	1.5	15本	(2本)	12	29	9本	7	15	4個	3～4	2	長方形	目が楕でできている,目の奥行きが浅い
10	(民 参考資料)			7	47	13本			4	2	13本	(0本)			7本							
32	鹿児島県立	悪石島の	2017	7	42	12本	26.5	42	5	2	12本	(0本)	21	27	9本	5.5	11	3個	2.5	1.8	長方形	ボゼマラ11とセット,歯の模様に規則性なし
11	博物館	ボゼ		7	42	11本			7	2	14本	(1本)			7本							のど奥が赤い丸(のどちんこ),地下足袋を履いている
46	ミュージアム	ボゼの面	1992	8	34	8本	20	34	7	1	14本	(0本)	13.5	35	9本	3.5	17	0個	×	×	×	ボゼマラ12とセット,展示で右のボゼ,目穴・耳たぶなし,瞳が紡錘形
12	知覧			7	32	8本			8	1	16本	(1本)			9本							喉奥は黒く塗り分けされていない(空間:縦:1cm×横:5cm)
47	ミュージアム	ボゼの面	1992	6	45	13本	25	49	7	1.5	13本	(0本)	14.7	30	8本	3.5	15	0個	×	×	×	ボゼマラ13とセット,展示で中央のボゼ,目穴・耳たぶなし
13	知覧			7	49	8本			6	1	16本	(0本)			10本							歯は上が黒のみ・下は色が交互
48	ミュージアム	ボゼの面	1992	7	40	10本	19	40	6	1	18本	(0本)	12.8	33	10本	2.5	10	0個	×	×	×	ボゼマラ14とセット,展示で左のボゼ,目穴・耳たぶなし
14	知覧			6	35	9本			6.5	1.5	18本	(0本)			11本							瞳は黒く塗り分けされていない(空間:縦:1cm×横:1cm)
34	十島村歴史	ボゼ面	1993	—	—	—本	—	—	—	—	—本	(—本)	—	—	—本	—	—	2個	—	—	—	ボゼマラ15とセット,展示場右のボゼ
15	民俗資料館				—	—本			—	—	—本	(—本)			—本							
34	十島村歴史	ボゼ面	1993	—	—	—本	—	—	—	—	—本	(—本)	—	—	—本	—	—	2個	—	—	—	ボゼマラ16とセット,展示場中央のボゼ
16	民俗資料館				—	—本			—	—	—本	(—本)			—本							
34	十島村歴史	ボゼ面	1993	—	—	—本	—	—	—	—	—本	(—本)	—	—	—本	—	—	2個	—	—	—	ボゼマラ17とセット,展示場左のボゼ
17	民俗資料館				—	—本			—	—	—本	(—本)			—本							
49	サザンクロス	ボゼ	1987	—	—	8本	—	—	—	—	13本	(—本)	—	—	×	—	—	0個	×	×	×	ボゼマラ18とセット,展示で左のボゼ,喉奥が二重,目穴なし
18	センター		-1997		—	7本			—	—	14本	(—本)										顎と歯の色が対称になっている
50	サザンクロス	ボゼ	1987	—	—	—本	—	—	—	—	13本	(—本)	—	—	×	—	—	0個	×	×	×	ボゼマラ19とセット,展示で右のボゼ,喉奥が二重,目穴なし
19	センター		-1997		—	—本			—	—	14本	(—本)										顎と歯の色が対称になっている
51	国立民族学	ボゼの面	1977	—	—	11本	—	—	—	—	11本	(—本)	—	—	×	×	×	—個	—	—	—	のどの模様なし
20	博物館				—	—本			—	—	—本	(—本)										顎と歯の色が対称になっている

第１表　ボゼメンの法量

図表 ボゼマラ 番号	所蔵館 (資料番号)	名称	受入 年	製作地	長さ	太さ (最大値)	先端	根本の 直径 (最大値)	備考
52 1	黎明館 (民 170)	杖	1972	—	105	3	6×3	—	ボゼメン 2とセット
53 2	黎明館 (民 440-1)	ボゼマラ	1975	悪石島	91	3.5	6×3.5	2	
54 3	黎明館 (民 440-2)	ボゼマラ	1975	悪石島	89	4	6×4	3.5	
55 4	黎明館 (民 1798)	ボゼマラ	1981	悪石島	115	4	5×3	3	
56 5	黎明館 (民 1799)	ボゼマラ	1981	悪石島	117	3.5	5×3.7	3	棒が直線に近い
57 6	黎明館 (民 1800)	ボゼマラ	1981	悪石島	117	4	6×4	2.5	ボゼメン 6とセット
58 7	黎明館 (民 2760)	ボゼマラ	1990	悪石島	107	4.3	7×4.5	2.8	
59 8	黎明館 (民 2761)	ボゼマラ	1990	悪石島	109	4	8×3	2	
60 9	黎明館 (民 参考資料)	ボゼマラ	2016	悪石島	110	4.5	4×2.5	2.5	
61 10	黎明館 (民 参考資料)	ボゼマラ	2016	悪石島	123	3	6×2.5	2.3	
62 11	鹿児島県立 博物館	ボゼマラ	2017	悪石島	134	3.4	7×3	2	ボゼメン 11とセット
63 12	ミュージアム 知覧	マラ棒	1992	悪石島	108.5	4	11×5.5	—	ボゼメン 12とセット
64 13	ミュージアム 知覧	マラ棒	1992	悪石島	114.5	4.2	8×4	2	ボゼメン 13とセット
65 14	ミュージアム 知覧	マラ棒	1992	悪石島	116.5	3.4	6.8×4.4	—	ボゼメン 14とセット
34 15	十島村歴史 民俗資料館	マラ棒	1993	悪石島	105	5	—	—	ボゼメン 15とセット
34 16	十島村歴史 民俗資料館	マラ棒	1993	悪石島	114	3	—	—	ボゼメン 16とセット
34 17	十島村歴史 民俗資料館	マラ棒	1993	悪石島	110	2	—	—	ボゼメン 17とセット
66 18	サザンクロス センター	(ボゼマラ)	1987 -1997	—	—	—	—	—	ボゼメン 18とセット
67 19	サザンクロス センター	(ボゼマラ)	1987 -1997	—	—	—	—	—	ボゼメン 19とセット

第２表　ボゼマラの法量

(第１～２表の註)

・名称は所蔵館データに従った。不明なものは（ ）で囲み，仮称で記している。

・表内の各項目の数値は，cm単位。目穴以外で数値に差異がある場合，その項目の最大値を記載している。

・不明・未計測・計測不可の項目については「—」を，項目に該当するものがない場合は「×」を記した。

・まゆげ・まつげ・目・瞳・耳・耳たぶの法量（サイズ）は２つあるので，表の上段が左，下段が右のサイズを示す。目穴が２つの時も同様に記す。また顎・歯の上段が上，下段は下のサイズを示す。

・まゆげ・まつげ・目・耳・鼻・顎の模様で「本」がついているが，これは縦線の数を示す。目については，黒色の場合もある。のどの模様は，鋸歯文を示す三角形または縦線の数を「本」で記した。

・鼻の直径は，鼻の棒状部分の直径。

・歯の本数に関しては，残存する数と欠損数を記しており，総数的には２つを合計したものになる。

＜図版＞

第１図：ボゼ（2018 年以前のボゼ）

第２図：黎明館のボゼ

第３図：テラでの盆踊り

第４図：悪石島学園での盆踊り

第５図：ボゼを呼ぶ太鼓

第６図：ボゼが大暴れ

第７図：ボゼ３体が勢ぞろい

第８図：ハッパン大将を踊る子供達

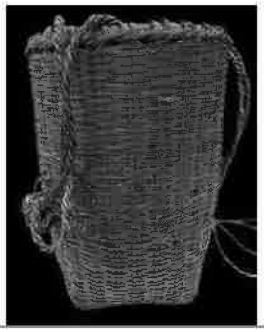
第９図：ボゼの最後

第 10 図：木の伐採

第 11 図：木を削る

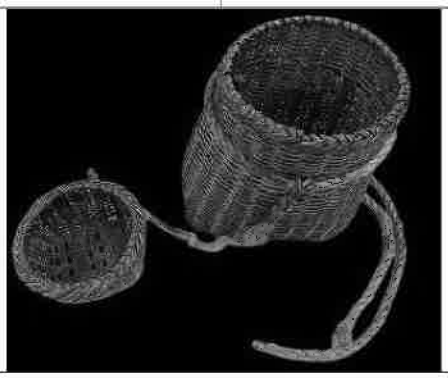
第 12 図：赤土づくり

第 13 図：残るボゼマラ



第 14 図：黎明館のシタミテゴ

（縁の拡大図）



第 15 図：黎明館の磯アマメテゴとフタ（左側）

第 16 図：ボゼメン作り

第 17 図：ボゼメン作り

第 18 図：ボゼメン作り

第 19 図：ボゼメン作り

第 20 図：ボゼメンとボゼマラの乾燥

第 21 図：ビロウ群落

第 22 図：葉の採集

第 23 図：ビロウの葉鞘

第 24 図：シュロの木

第 25 図：ボゼの着付

第 26 図： ハダカボゼか？（左側）

第 27 図：1963 年のボゼ

第 28 図：1965 年のボゼ

第 29 図：1975 年のボゼ

第 30 図：九州地区民俗芸能大会（1990 年）のボゼ

第 31 図：パラダイストカラ・イン・アクセキ（1999 年）のボゼ

第 32 図：鹿児島県立博物館のボゼ（ボゼメン 11，ボゼマラ 11）

第 33 図：ミュージアム知覧のボゼ（左右に３体）（右からボゼメン 12～14・ボゼマラ 12～14）

第 34 図：十島村歴史民俗資料館（中之島）のボゼ(右からボゼメン15～17・ボゼマラ 15～17)

第 35 図:サザンクロスセンター（与論島）のボゼ（左からボゼメン 18～19・ボゼマラ 18～19)

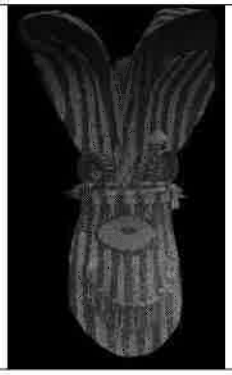
第 36 図：ボゼメン１

第 37 図：ボゼメン２

第 38 図：ボゼメン３

第 39 図：ボゼメン４

第 40 図：ボゼメン５



第 41 図：ボゼメン６

第 42 図：ボゼメン７

第 43 図：ボゼメン８

第 44 図：ボゼメン９

第 45 図：ボゼメン 10

第 46 図：ボゼメン 12

第 47 図：ボゼメン 13